

## チヤブチヤブ

ばなし

## 葛原しげる

東京は、「都」ではなく「市」のころ、十五区に分れていた。その本郷区の蓬萊町から、市外の大久保百人町へ移転後間もなく、柏木へ移り、また更に、大久保駅近くの百人町へ移って、次女を恵まれたとき、長女は三歳になっていた。それから数年のうちに、長男を恵まれ、三女を恵まれた。それらのお友達が次々に集つて来るようになつた。明暮賑やかな生活中に、私は、多くを、幼児たちに、教わる事によつて、驚きもし、よろこびもした。

当時、大久保あたりには、まだ水道がなくて、掘抜き井戸の水を、手押しポンプで

汲み上げては、バケツで、勝手にも、風呂場にも運ぶのであつた。風呂桶小一ぱいの水汲みは、女中や、家内にとつて、かなりの労働であつたが、風呂好きの私は、時に、自ら、ポンプを押して、皆に、バケツで運ばせることもあつたが、ある土曜日の朝、出勤間際の出かけに、

「今日、あれを頼むよ。午後、日の暮れないうちに帰れるから……」

と、頼んだ。

「あれを……。はい、はい。」

長女文子は、耳さとく、家内への私の頼みを聞いて、

「あれって、なあに——」

と、母に尋ねたが、

「あれって、あのね、お父さまの大お

きな、あのう——」と、すぐには、返事をしなかつた。

お父様の大好物、それは、何。まだ、幼児文子には分つていないが、母たる妻には、よく分つていた。それは、晝風呂——

大きいバケツが、ザザザのザーザー。  
小さいバケツが、チョブーン、チョブー

ン。——

「あら、おもしろい」

入浴してみたいというのが、近頃の夫婦間の話題になつていて。それをすぐ合点出来るのは、夫婦間自然の諒解ともいおうか。

午後になると、早速、風呂桶の水汲みが始まつた。

ポンプを押すのは、女中さん、

ガツタントーン、ガツタントーン

水はポンプの口から勢よく流れ出して、下に受けてあるバケツに、すぐ一杯になる。それを、ぐいと引っさげては、湯殿へ運ぶのは奥さん。傍で見ていた幼女文子は、ポンプの流れ口から、後しばらく、少しの残り水がチョロチョロ流れ出しているのを見つけて、

「私もね、文子もね」

と、おもちゃのバケツ、金魚の絵がかいてある小さいのに、受けては、母に続いて運ぶ。

—— 60 ——

「お嬢さま、しっかりと、しっかりと。」

「ガッタントーン、ガッタントーン」

「さ、こぼさないように、ザザザのザーザー」

「おもしろい、おもしろい。チヨブーン、チヨブーン、チヨブーン」

土曜日午後の大久保駅、その頃は、露天のホームで、乗降客も少なく、陸橋を越えて踏切近くへ急いで戻ると、横町入り口の角の赤ポストの側に立っている白エプロンのおかっぱさんは、まさしく、文子。手を上げて会図をすると、目敏く見つけて、駆け出して来る。つまずいて転んではならぬと、こっちからも、半ば駆け出して近づくより早く、文子は、両手をあげて満面の笑顔を湛えて、かけよって来る。すぐ、手をつないで、他には、通行人のない横町に入る。並んで、急ぎ足に帰る道中、文子の報告が始まった。チヨコチヨコ、急ぎ足で、仰ぎ見上げては、

「ね、ね、お父さま、あのね、あのね」「うん、あの、何だって」

「あのね、あのう——あのう」

とばかりで、少しも報告が発展しない。実は、父に引かれている小さい手を、父の大

きい手が、その一步ごとに、おのずから、引張り上げるので、うまく、ことばが出ないのだ。「あのね」と言いかけると、ぐいっと片手を引き上げられるので、そして、父の歩幅は大きくて、前へ進むのが早いので、それに連れまいとする努力が勝つて、ことばが敗けてしまって、続かないのである。

それに気のついた若き父は、はじめて、歩幅を狭ばめて、幼児と同じく小刻みに、チヨコチヨコ、チヨコチヨコ。

やつとのことで、父子の歩調がぴったり合って、一つになると、小さい手も、大きい手に、一歩ごとに引張り上げられることがないで、他には、通行人のない横町に入る。並んで、急ぎ足に帰る道中、文子の報告が始まった。チヨコチヨコ、急ぎ足で、

「あのね、あれが、もう、わいたー」

「もう、わいたの。そう、有りがとう」

「おひるご飯がすむと、すぐ、

ねえやが、ガッタントン、トン、お母ちゃんが、ザザザのザザザー

文子が、チヨップーン、チヨップーン

「そ、うかそ、うか。ねえやのガッタントン、

ガッタントン。

お母さまの、ザザザのザザザー。

文子ちゃんの、チヨップーン、チヨップーン。

え、な、に、あの、金魚のバケツで。そう。金魚が、お水を、入れてくれたのかな。あ

りがとう」

横町の半ほどまでは、この調子で、大人小人の歩調も、よく合って、二人の歩みは極めて自然であったが、何しろ、大の男が強くて、幼女の歩調に合わせて、チヨコチヨコと、小走りに、おのずから、速足で歩き続ける不自然さが、おとな呼吸をはずませて、苦しくなってしまったので、ふと思いついた。それは、おとなひととまた

ぎを、小人の二またぎに、リズムを合わせ揃

えること——即ち、おとなが「左、右」と

二歩運ぶ間に、小人に「左、右。左、右」

と四歩運ばせて、しかも、そのリズムを合  
わせ捕えること。これに気がついたので、少

しの注意で、父私の一あしと、幼女文子の

二あしが、ぴったり合うようになり、どち

らも、不自然なしに、気楽に歩み進めるよ

うになった。

「さ、早く帰って、はいろうね」

「今日は、ゆっくりね。また、ブクブク

こきえて。ゆっくり遊びまちよ」

「タオルで、ブクブクこきえてね……よ

うし——」

「あら、おもしろい。ブクブク、ジュジ

ュジュのジユ、ね」

「ようし」

「大きいブクブク、どっちやりね」

「ようし」

「ゆっくりね」

「あんまり、ゆっくり、お湯につかって  
いる、文子ちゃん、ふやけてしまふよ」

「あら、おかしい。」

「文子が、ふやけたら、あんこつけて、

たべてしまおうか。」

「あら、いや——だ。」

「アハハ……。さ、帰った。ただいま

「お母ちゃん。ただいま——」

「お母ちゃん。ただいま——」

さて、お湯はまだ少し熱いときいて、独

り、先にはいつて、湯槽の中で、繰返し考

えたことは、「おとなが、子どもと並んで

……特に、幼児の手を引いて歩く時には、お

となの方から、歩調を、子どもに合わせてや

つて——せめて、同じリズムで歩くこと。

おとなでも、二人以上、一しょに歩く時

には気のついた者から、歩調を合わせること。これは文化生活の第一歩であろうよ。

都會でも田舎でも、時々、夫婦二人が一し

ょに歩く姿を見かけるが、わけて、田舎で

は、夫の後数歩も離れて、ついて行く細君

を見る。それもどちらも洋服に靴はきの若

夫婦が、「アーム、イン、アーム」でなく

ても、並んで歩くのに、歩調が、揃つてい

ないのは、まことに見苦しい。夫唱婦隨は

昔の別事、夫の歩みに、夫人が、合わすよ

りも、夫の方で、気を利かして、夫人の歩  
みに、歩調を合わせ——その心遣のある男

性こそ、頼もしい夫であろうよ」

と、実は自分らのことも思い合わせてい  
ると、湯殿の入り口の扉を、外で軽く叩く

音。小さい音、それは、幼女文子の小さい

手で、軽く叩く音だと、はつきり分つても

何となく、どうするか、ためしてやろうか

と、だまっていると、また、コツ、コツ。

コツ、コツ。

かねて、他人の部屋を、いきなり、だま  
つて開けてはならぬしつけもしているの

で、今日は、一しょに入浴する約束になつ

っていても、少し後の方が、湯加減も、程よ

くなるし、と、時をかせぐ心持もあって、  
意地悪くでなく、だまっていると、次には

軽く、小さい振りこぶしで叩くのではなく、  
ゴト、ゴト、扉を平手で押し搖がして、

「はいってもいいで、ちゅか」

の合図をはじめた。それが、二度三度、続

いたので、私の方から「おはいり」と、声

をかけようと思つた瞬間、ゴトリ、扉を、

少し、細目にあけて、小さい口をのぞかせ

るようになよせて、

「お父ちゃん、チャブチャブでちゅね」

という。勿論、わかりきっていることで、お父様は、入浴中である。その、わかりきっている事を、事改めて、口にするせつばつまつた欲求の程も、よく分るので、

「おはいり。もう、ちょうどよいあんぱいになつたから、さ。あつくなくなつたよ。さ——」

と、浴槽の中のお湯を、チャブチャブ音を立てて、招いてやると、後に来ていた母が扉を開いてやるのを、待ちかねて、はいつて来る全裸の幼女。淡紅色の小形のタオルを片手に、急ぎ足によつて来る。ニコニコ、チョコチョコ。

「すべつちゃだめよ。ゆつくり、ゆつくり」

と、母の手がさしのばされるので、洗つてね」と、お湯を下半身にかけて洗つてやると、急に口を引き締めて少し、しかめつ面をするので、

「大丈夫。さ、来い。ちょっとあんよを」「チャブーン」と、声を立てて、「アハハ……」と如何にも嬉しそう。

「まだ、少し熱いかな。水を、うめて上げようね」と、踏み台の上に待たして、側に汲んであの大バケツの水を、大きい杓で一パイ、ザザー。「ぬるくなつたよ」と、かきませてみせると、「もう一ぱい」と催促する。「ようし、もう、一ぱい——」と汲んでいると、バケツの側に、おもちゃの金魚のバケツもおいてあるのが目に付いたので、

「おう、文子ちゃんのバケツもあるね。それ、貸してね。それで、おまけに、もう一パイね。」

というより早く、文子は、そつと踏み台から下りて、自分で、自分のバケツに、水いっぱい入れたのを、両手で持ち上げて、踏み台に上つて、

「チャブーン」と、声を立てて、「アハハ……」と如何にも嬉しそう。

「おう、もう、すっかり、ぬるくなつた、ぬるくなつた」

と、両手で、お湯をかきませかきませ、実は、まだ少しは熱いかとも感じながら、浴槽の中から両手を差出して、小さい体を抱え上げて、

「もう、熱くないですよう」と、しゃがむと、両腕で、しっかりと、父の体にからむように抱きついて、

「あつくないでちゅ」

と、口ではいいながら、まだ、本当は、少し位熱いのか、何だか緊張した面持で、堅く口を結んで、不安げなので、抱き合つたままの全身を、うねらせて、お湯を、かきませると、お湯の波が立つて浴槽から、溢れ出る音。チャッポン、チャッポン。

「やあ、チャッポン、チャッポン。おもしろいおもしろい。チャッポン、チャッポン」

文子は、「チャッポン、チャッポン」と二コリニッコリ。

私の「チャッポン、チャッポン」文子の「チャッポン、チャッポン」何度も繰り返さぬうちに、文子は、私の

抱擁から離れて、独り立つて、自ら小さな体を、うねらせては、湯の波を立つて、悦び出したので、

「ちつとも、熱くないね、もう」

「ええ、熱くないでちゅ」

と、独りで、しゃがんで、ニッコリ ニッコリ。

さて、浴槽から、出て、高窓を開けると、白い湯気が出てゆく空には、白い雲が浮んで見え、庭の木立の枝振も、目につく。隣家の屋根から雀も、とんでも来る。

文子の頬っぺも真っ赤になつたので、踏み台に腰かけさせ、よく洗つてやっているうちに、全身も冷えたので、また、浴槽の中に一人並んで、しゃがんでからのこと、私の幼時、郷里の浴槽で、父に、からかわれた遊びを思い出して、文子に試みた。それは――

「よく温まるんですよ。じつとしてね。

静かにしてね。お湯を動かさないで、ね。よく、沈んでね」

息をころして、二人とも静かにしてか

ら、私は、浴槽の底から、揃えた両手の指先十本並べて、湯の表面ぎりぎりまで差し上げて、

「や、や、たいへんたいへん」

と声を上げると、文子も、びっくり。

私はわざと声をふるわせて、

「指が、指が――」

と、急に、短かくなつてしまつて見える十本の指を、少し動かしては、文子の目をひくと、

「あら、あら、お父さま、たいへんたいへん」

と、立ち上つて、急に大声。

「お母さま――」

勿論、夕食用意の忙しい母が、すぐ飛んで来ないことは分つてゐるので、

「大丈夫だいじょうぶ、ほら、大丈夫」と、両手を差し出して、十本の指を見せる

手四本の指二十本を並べて、湯の下から、徐々に、湯の表面直下まで差し上げては、短かくなる指のおもしろさに、興じ続けて、小人の指だといつたり、指の手品よと、樂しんでいたが、いまだほんとの幼児、その物理的原因も尋ねないし、光線の屈折の説明も求めないで、ただ短かく見える現実をおもしろがつたことである。

それで、タオルや手拭でする「大きいブクブク ジュジュジュのジュ」の約束を果すことも忘れて、父子とも幸福であつたことはいうまでもない。

のち、母と入浴した時も、

「文子の指ね、小人の指よ。指の手品、教えて上げまちよう」

と自慢げであるので、母も、ただ、おもしろいおもしろいと、母の指十本をも、短かく見せて、幼児と共に、チャップチャップを、楽しんだこともいうまでもない。

(昭和36・6・20日)

と、目を丸くして、小さい両手で、大きい長い指十本を、いちいち、検査する真剣さ。

再び一しおに並んでしゃがんで、大小の